

「鳥羽恋塚物語」とその周辺

阪口弘之

一

加賀掾正本「鳥羽恋塚物語」は、これまで八行四十九丁本（京大・大阪府立図書館蔵。後者は前者の後印本）と早大蔵の絵入十七行十五丁半本（一丁落丁カ）が知られる。共に山本版で、文辞節章共に殆ど差異はない。このうち、八行本が「近松全集」^{（注1）}（朝日新聞社、大正十四年六月）及び「近松門左衛門全集」（春陽堂、大正十一年八月）のそれぞれ第一巻に翻刻される。

そして、両全集刊行後、ほぼ半世紀が過ぎ、その本文は、確定をみたかにみえる。しかし、果してそこに問題点はないであろうか。私には聊か疑問を覚えるところがある。それは、五段目所収の節事「九品の浄土」が、この「鳥羽恋塚物語」（延宝九年六月以前）に僅かに先立って上演の、同じ加賀掾作品「大原問答」（同六年三月以前）で既に語られており、その再用という点である。

「大原問答」の加賀掾正本自体は、現在、その存在を確認出来ない。しかし、この作に「九品の浄土」が含まれていたことは、延宝六年八月刊行の加賀掾段物集「竹子集」（東京芸大他蔵）に、「大原問答」の題下に「名所」「道行」「九ほんのじやうど」の各節事が収

載されていることで明らかである。更に、それら節事との比較対照から、「大原問答」が後の加賀掾正本「念仏往生記」とほぼ同内容であることも早くから説かれている。こうして、「九品の浄土」は、「大原問答」「鳥羽恋塚物語」、更に「念仏往生記」と、加賀掾だけでも三用をみるのである。

節事の再用三用は、決して珍しいことではない。「九品の浄土」も、人気の節事であったのであろう。しかし、「大原問答」の改題本（一部改作力。後述）である「念仏往生記」はしばらく措き、「鳥羽恋塚物語」の場合は、「大原問答」との繋がりには直接的でない。こうしたいわば異作間に於て、まだ耳新しい先行作の節事を、ほぼ連続する形で再用し、積み込んだというのは、その節事が余程秀れていて、積極的な襲用になったか、それとも、そこに何らかの支障があつて、窮余の策として、間に合せて的に襲用に走ったかのいずれかであろう。

「鳥羽恋塚物語」の場合、「九品の浄土」で作品が締め括られているが、同じ五段目で、勅使萩原中将が、南都大仏開眼御修法の導師を法然に申し渡した条、又、為若参会を重源に知らせることを約諾した条など、いずれも、直後に「九品の浄土」（極楽の物語）が続く

為、その顛末の叙述を見ぬままに終っている。聊か中途半端な印象で、作劇上の不備が気になるのである。おそらく、「九品の浄土」再演は、当初からの構想下の所産ではなく、そこに何かの事情があつて、こうした形になつたのではなからうか。以下、先ずそのあたりから考察を加えてみる。

扱、如上の問題を検討する上で、重要な示唆を与えてくれる一本がある。前記早大蔵の絵入十七行十五丁半本で、注目すべきは、その五段目全体に改刻が認められることである。即ち、実丁十三丁（丁付「十六」）十一行目と十二行目の間で、板木の接合が認められ、十一行目の本来第五とあるべきところも、その板木操作の際、左縦棒が削られ、第五となつてゐる。そして、十二行目以下の六行と、十四・十五・十六表（終丁。裏ナシ）丁の二丁半が、新しく改刻されている。これは刷りからみて間違いない。このように、早大絵入本は、五段目を改刻した再印本である。そして、重要な事実は、この改刻本文節章が、八行本のそれらと殆ど同じという点である。このことは、八行本又、初演時のテキストでないことを意味するであろう。八行本が、もし初演時のものであれば、改刻本文と一致する説明がつかない。どうやら、絵入初印本の五段目には、現在知る得るのとは異なる本文節章があつたらしい。

従来、八行本の、とりわけ京大本（献上本）のりっぱさなどもあるが、こうした疑問が提起されることはなかった。しかし、「鳥羽恋塚物語」の成立時下限を示す段物集「大竹集」（天理図書館他蔵）を取りあげても、そこには、「為若道行」と「勧進帳」のみが収められ、「九品の浄土」を見ることが出来ない。既に「竹子集」の「大原問答」下に、「九ほんのじやうど」が収載されていて、重複

を避けたという見方も一応出来るが、例えば、「虎遁世記」の「四機」や、「虎之巻」の「乱曲」などは、「竹子集」「大竹集」双方に収録されていて、こうした見方は成り立たない。おそらく、「九品の浄土」は初演時にはなかったから、それを除く二つの節事だけが、「大竹集」には収められているのであろう。八行本にせよ絵入本にせよ、「九品の浄土」を含む五段目は、こうして「鳥羽恋塚物語」再演以降のものであることがほぼ推測出来るのである。

二

それならば、「鳥羽恋塚物語」の初演時の五段目本文はいかなるものであつたのだろうか。既述の如く、現存正本からはその手懸りを得られそうにもない。そこで思いあわされるのは、この「鳥羽恋塚物語」とほぼ同内容をもつ江戸板の「袈裟御前物語」（東大蔵）である。

先ず、この正本の書誌的事項を簡単に述べておく。

中形の絵入五段本で、十七行十四丁。内題は削られ、替題箋に「けさ御前物語 全」と墨書がある。しかし、板心に「とは」とあり、本来は、上方板同様に「鳥羽恋塚物語」と呼ばれていたかもしれない。刊記は、終丁裏本文末に「山本九左衛門板」とのみあり、刊年などが、内題と同じく、再印の折あたりに削除された可能性がある。したがって、その刊行時を詳らかに出来ないが、版式からいえば、天和貞享頃、あるいは元禄初年の刊行というところであらうか。ともあれ、延宝九年六月以前刊の「鳥羽恋塚物語」よりは、後の刊行である。

この「袈裟御前物語」は多くの江戸板同様に、上方板「鳥羽恋塚物語」の省略改変本である。文辞を上方板にそのまま取り、それを適宜刈り込んでいく方式をとる。ために、多少の省略と異同はある

鳥羽恋塚物語

○文覚は、源渡の一子為若を伴い、新黒谷に法然を訪れ、その弟子入りを懇望する。

○そこへ勅使萩原中将入寺あつて、来る三月十三日の南都大仏開眼の御修法に、法然その導師たるべきとの勅諭を述べる。法然は、よき仏縁と、為若の参会を願い、これを聞き届けた中将はその旨を重源（源渡）に知らせるべく南都へと赴く。

○法然は、安楽坊に命じ、行方不明の為若の祖母尼公を探すべく、洛中に明日決定往生の血脈を出す旨を触れさせる。

○法事の日、祖母と為若は不思議の対面を果す。祖母は、法然に為若の元服を願うが、法然は、為若もろ共に九品の蓮台のすみかの体を聴聞させる（九品の浄土）。

○祖母は喜んで為若を法然に奉り、為若は後、念仏修行の大道人として名高い光明房となった。

が、内容は全く同一である。^{注3}ただし、それは四段目末迄で、五段目は大きく異なる。そこで、両本の五段目の粗筋を、次に対比しながら示してみる。

袈裟御前物語

○萩原中将まさきは、南都へ来臨あつて、新黒谷源空法然上人を大仏供養の導師とすべき旨の勅諭を申し述べる。

○俊乗坊重源の一子為若丸は、文覚上人の引合いで、法然の弟子となり、光明坊と名乗っていたが、父との対面を文覚に願い出て、そのとりなしで、東大寺にて喜びの対面を果す。

○建久六年三月十三日、大仏供養の折、導師法然は、念仏を三遍唱えただけで供養をおえんとして、八宗の僧達から罵りを受ける。

○しかし、法然は少しも騒がず、再び盧遮那仏に向い、南無阿弥陀仏と唱えると、仏前の袈裟御前の位牌が二つに割れ、亡者の姿が鮮やかに虚空に上る不思議が起る。

○亡者はしばらく虚空に佇み、自らは元毗盧遮那仏、衆生済度のその為、聖武皇帝の夫人と成り、今又、源渡（重源）が妻と成り、菩提心を勧め、この大仏の造立、再興を成さしめたと述べ、やがて三尊の阿弥陀仏と現れる。人々、光明遍照の奇特をまのあたりにして、覚えず知らず合掌する。

右表をみてみると、「九品の浄土」の節事を眼目とする「鳥羽恋塚物語」に対して、「袈裟御前物語」は、靈驗奇瑞の局面が続く、糸操やからくりも駆使されていたかと思われる程に演出本位の作柄となっている。もちろん、「袈裟御前物語」の場合、節章は記されておらず、上演テキストとみることは出来ない。が、袈裟御前の位牌が割れ、亡者の姿が虚空に上り、やがてそれが三尊の阿弥陀仏と現れる件りなど、本来、舞台上上演されていたとみてもおかしくない内容である。これは、江戸板としては注意を要するところである。

一体、上方板を改変したこの種の江戸板は、読み本として刊行されるのが普通である。したがって、からくりや糸操が盛り込まれた演出本位の場合などは、思い切った改変や省略の対象となる場合が少なくない。「袈裟御前物語」が「鳥羽恋塚物語」の省略改変本であることは動かぬが、五段目に関しては、もし、後者を、前者の如く大幅に書き改めたとしたならば、江戸板の一般的改変の方向とは逆行するものであり、ややそぐわぬものを感じる。その意味で、「袈裟御前物語」五段目の装い新たに見える世界も、それが余りにも演出本位であるだけに、上方板を江戸板に移す段階での加除変更による創出ではなく、既に上方板段階からそうなっていたというべきもののように思われる。つまり、「袈裟御前物語」は、その五段目も含めて、上方板をかなり忠実に受け継いでいるという推測が成り立つ。これに関しては、「袈裟御前物語」が、江戸板には珍しい五段本で、しかも、板元が、上方の山本九兵衛、九右衛門と直接の関係を有す山本九左衛門であることも注意したい。

山本九左衛門の六段本自体は数多くある。しかし、概して言えば、他の江戸諸板に較べて、上方板により忠実な傾向性が看取出来る。

改変の幅が小さい。しかも、該書は、五段のうちのある段を二段に分け、改変を加えて六段本に仕立てたという通例の江戸板ではない。となると、四段目迄の内容形態を併せ考えてみて、この江戸板は、上方板の五段の段分けを、ほぼそのままに踏襲したテキストとみて差し支えなさそうである。つまり、省略改変本というものの、その改変は文辞部分にとどまり、内容世界や段分けにまで踏み込んだものではなかったと想定される。そして、もしこの推測が正鵠を射たものであるならば、その依拠した上方板「鳥羽恋塚物語」は、もとより現存のそれらではない。早大絵入本の初印本がそれと推定される初演時の正本であった筈である。^{注④}そして、その正本五段目には、まさしく「袈裟御前物語」と近似した本文が綴られていたものと確信する。

このことは又、次の事柄からも傍証出来よう。それは、「鳥羽恋塚物語」の改作である「一心五戒魂」(元禄十一年正月以前、竹本座)五段目が、現存の「鳥羽恋塚物語」よりも、「袈裟御前物語」と結構相似するという事実である。

「一心五戒魂」は、文覚が那智の滝での荒行の最中に悶絶して、その夢うつつに、自らの過去未来の行状をみるという筋である。それだけに、「鳥羽恋塚物語」を下敷にしてはいるものの、五段目に「九品の浄土」(現存「鳥羽恋塚物語」や「大仏供養」(「袈裟御前物語」といった場はない。しかし、文覚が為若を誘い、東大寺を訪れ、俊乗坊重源との父子対面を果させる条、又、段末で、「上より紫雲たなびきて。袈裟御前の御姿影の如くに現れ出。いかに文覚上人我しやうぐの縁により仮に人界の無常を示し。^{注⑤}云々」と説き、そのまま「那智の滝見のくはんおんと光を放ち給ひ」、「済度方便ま

のあたり」の奇特をみせる条など、明らかに「袈裟御前物語」と同工である。そして、これらは、現存「鳥羽恋塚物語」には見当たらない局面である。つまり、「一心五戒魂」は、「袈裟御前物語」と深い関連をもつことが判る。しかし、このことは、「一心五戒魂」が江戸板の「袈裟御前物語」に直接拠っていることを意味するのではない。作品全体に亘って、文辞を丹念に比較すると、やはり、上方板の「鳥羽恋塚物語」との関係が辿れる。したがって、「一心五戒魂」が依拠した正本は、現存のそれではないが、「袈裟御前物語」も拠ったであろう初印本の「鳥羽恋塚物語」であることが、ほぼ明らかとなるのである。正本の出現を待ち望みたい。

三

「袈裟御前物語」五段目は、「鳥羽恋塚物語」の初演時同段の面影をよく伝え、その「鳥羽恋塚物語」では、大仏供養の場での奇瑞霊験が、一つの見せ場であったことが明らかとなった。しかし、そうした見せ場も、早く再演時あたりには、現存正本に見る如き節事主体の段へと変貌をみた。何故、そうした書き換えがなされたか、今、結論からいえば、当初、五段目の大仏供養の場には当て込みがあったが、再演時には、それがさ程のニュース性を有し得なかったからではなかろうか。

江戸期の東大寺大仏殿再興の機運は、僧公慶の活躍で盛り上る。年譜で追うと、天和三年（一六八三）、大仏殿再建が計られ、翌貞享元年五月八日、公慶は、幕府にその為の勧進を願い出て、六月九日、許しを受ける。かくて、翌年より大勧進が開始される。大坂の操界

でも、こうした機運を当て込んで、西鶴が加賀藩に「凱陣八島」を、近松が義太夫に「出世景清」をそれぞれ書き与え、宇治竹本両座の競演となったことは、夙に信多純一氏によって明らかにされたところである。^{注⑥}

大仏殿造営の方は、この後、元禄元年（一六八八）四月、造始の千僧供養が営まれ、同十年四月立柱、宝永二年（一七〇五）閏四月上棟の礼、そして同五年六月再建成就ということになるが、「鳥羽恋塚物語」をめぐる前記の問題に關していえば、こうした再建大事業に先立つ延宝八年（一六八〇）に、東大寺で次の如く法華会の催されたことが注目されるように思う。

○十二月東大寺執行、法華会五日、之間七大寺僧侶相聚、勤之。
上人為第二夜、堅義職。（公慶上人年譜）^{注⑦}

この延宝八年（一六八〇）は、治承四年（一一八〇）十二月二十八日、重衡による奈良炎上（「山槐記」他）からちょうど五百年目にあたる。十二月の法華会は、その五百年法要として修されたものである。「鳥羽恋塚物語」大仏供養の場は、この法華会そのものであったとまでは強弁し難いにしても、こうした五百年忌を当て込んだという見方は成り立つ筈である。少なくとも、大仏炎上五百年という人々の関心を背景に設定された場面であることだけは間違いないからう。「鳥羽恋塚物語」の初演は、延宝六年八月刊の「竹子集」にその節事が見えぬこと（同九年六月刊「大竹集」に初所収）からみて、この時を遡ることは先ずあり得ない。したがって、五段目に当て込み有りと推測が正しければ、その初演は、この延宝六年八月から同八年末迄の間、敢えて言えば、後者により近い頃といえるのではなかろうか。

一方、再演の時期はというと、残念ながら、これも確定することは出来ない。しかし、後述の如き理由より、天和三年二月以降の上演とされる「念仏往生記」よりは、先立って再演をみたことは間違いない。しかも、延宝九年六月刊の「大竹集」所収の「為若道行」「勸進帳」が、絵入本よりも、再演時以降の正本である八行本のそれらにきわめて近いこと（殆ど同じといってよい。絵入本もさ程遠くはないが、「大竹集」が八行本を直接踏まえていることは確實である）を併せ考えると、従来、本作の成立下限を示すといわれてきた延宝九年六月には、既に再演をみていた可能性が強くなる。おそらく、初演後、程遠からぬ時期（延宝八年末以降。したがって同九年前半）に、早々と再演をみたものと想定される。

しかしながら、当初、当て込みの目玉であった五百年法要への人々の関心は、延宝八年十二月法華会をピークに急速に薄らいでいったのであろう。この再演時には、当て込みとしての五百年法要のニーズ的価値は、既に色褪せつつあったと思われる。そうしたことが、「大仏供養」の場にかわって、「九品の浄土」再用という大幅な改変に繋がったように思える。尤も、大仏殿再興への機運は、徐々に高まりつつあったに違いない。作品の側からみても、四段目に描かれた俊乗坊の大仏殿修造勸進の場は、再演時にもそのまま継承されているし、大仏供養の件も、変改され、間接的な形ではあるが、依然としてそのことには十分触れられているのである。上方では、延宝三年三月「大仏供養并かまたりの大仏」（大英博物館蔵^{注⑧}）の刊行をみるが、操界のこうした動向と相俟って、「鳥羽恋塚物語」上演も又、大仏再興の機運と深く結びついていることが理解されるのである。

四

このように、五段目改変は、当初の当て込みが、再演時以降、その意味を殆ど失ったことに拠ると思われるが、それならば、その改変にあたって、何故「九品の浄土」が取り込まれたか、次にその再演の理由について考えてみたい。

これには、もちろん第一に、「九品の浄土」の節事としての好評があった筈である。しかし、人気の節事ということだけならば、「九品の浄土」以外が取り入れられてもよかった。したがって、問題は「九品の浄土」再用に、他ならぬ必然性があつたかどうかであるが、これについては、「九品の浄土」を含んだ「大原問答」と、「鳥羽恋塚物語」四段目末から五段目にかけての世界が比較的近いという、内容上の類似性が注意されるように思う。

「大原問答」は、文治二年（一一八六）、天台宗の僧顕真が、大原の勝林院丈六堂に法然を招いて催した、世にいう大原問答を素材とする。ただ、浄瑠璃（「念仏往生記」に拠る^{注⑨}以下同）では、これを建久元年三月、黒谷龍善寺でのこととする。今、その場面が描かれた三段目の粗筋を、必要箇所を追って示せば、次の通りである。

建久元年三月、法然は、弟子住蓮坊、安樂坊、蓮生坊らを召具し、諸宗の僧と宗論を闘わしていた。延々と続く論議の席上、他宗の者が法然を狗賓坊と嘲笑ったのに怒った蓮生が、大蛇を振り廻すのを見て、俊乗坊重源は自力か他力かと問いつめ、これを制す。論議の果て、俊乗坊を始め一同が、法然に屈服し、念仏を唱え、上人は金色の勢至菩薩と現れる。

右梗概で明らかのように、ここでは、この作の主人公である蓮生（熊谷直実）と共に、法然と俊乗坊が重要な人物として登場している。一方、「鳥羽恋塚物語」四段目末では、俊乗坊の子為若の孝心に感じた文覚が、為若を法然の弟子とすべく、自ら召具し新黒谷に赴く。そして、五段目では、「袈裟御前物語」梗概に示した如く、これ又、為若を伴い奈良へ赴き、俊乗坊との父子対面を果させる。そして、法然も又、大仏供養の導師を勤めたこと、既述の通りである。このように、「大原問答」と「鳥羽恋塚物語」は、登場人物が一致し、両作間に共通の世界が広がる。したがって、「鳥羽恋塚物語」での、「大原問答」の節事「九品の浄土」の再演は、こうした両作の共通性を踏まえた上での所為ではなかったかという想定が成り立つ。おそらく、改変者は、その類似性を意識し、むしろそれを前提とする立場で、改変を施したのではなかったか。というのも、こうした事例を他に求めることが出来るからである。

例えば、義太夫正本「源氏烏帽子折」（元禄三年正月初演）第五段には、元禄二年秋の伊勢遷宮と同三年干支の当て込みがある。このため、再演以降は、伊勢参宮と「柱暦」の節事にかえて、加賀掾の「三社詫宜由来」（延宝六年正月）の景事「二位中将宮めぐり」（牛若宮めぐり）と改訂）を取り入れているが、その場合に、「三社詫宜由来」からの景事再演は、初演本第五段に、伊勢・石清水・住吉の三社の御示現の趣向があり、それがヒントになっている公算が濃い。

慶大蔵絵入本「源氏系ぼしをり」^{注10}（十七行十四丁半、山本板。山城少掾旧蔵本も同板か。大阪府立図書館蔵武蔵三右衛門板はその覆刻本）を見るに、この三社御示現の様子は挿絵にも描かれ、それな

りの見せ場であった筈である。しかも、この趣向は再演本にもそのまま襲用されている。すれば、三社御示現から「三社詫宜由来」が思い浮かべられ、しかも所収景事は「宮めぐり」という恰好の素材でもあり、そうしたことからこの景事の導入となった可能性は濃い。「鳥羽恋塚物語」と「大原問答」の関係も、まさにこれと同列のものであった。改変時の他作からの節事導入も、必ずしも思いつきの放恣なものではない。節事だけが内容世界と脈絡なく切り離されて導入されているのではなく、作品世界の調和、統一性はそれなりに配慮されていた事例である。

扱、「鳥羽恋塚物語」に於て、かくの如く「大原問答」との共通性が意識されていたとするならば、改変箇所以外の趣向中にも、例えば、俊乗坊がその子為若を欺き、それと名乗り合わせぬ説経「萱萱」^{注11}がかりの趣向（四段目）の如く、「大原問答」の同工局面を直接下敷にしているとみてよさそうなものも指摘出来る。勿論、著名譚だけに、これなど説経の影響も当然考えられよう。しかし、共通項を多く有す両作間に於て、この趣向がそれぞれ相当重要な劇局面を形成していることを思う時、偶然的の符合以上のものを看取して差し支えない筈である。そして、このことは、「鳥羽恋塚物語」に於ては、改変時のみならず、初演当初から「大原問答」が意識されていたことを想定させること、勿論である。どうやら、「鳥羽恋塚物語」は、「大原問答」の相当な影響下に成った作と定位出来るようである。しかも、如上の見方に立つ時、更に注目されるのは、その影響が「鳥羽恋塚物語」にとどまらず、その改作である「一心五戒魂」にまで及んでいそうなことである。

「一心五戒魂」は、前述の如く、那智の滝での荒行中に絶息した文

覺の胸中から五色の玉が飛散し、文覺は夢うつつに、自らの過去未来の行状——殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五戒を犯す——をみるという筋である。五色の玉は、題名の示す如く、文覺が五戒を次々に犯すという筋展開と巧みに結びつけられていて、この作品を特色づけている。しかし、この一大趣向も、「一心五戒魂」に始まるというよりは、実は、「大原問答」五段目の、黄泉路に赴いた蓮生坊に、五色の鬼どもが、殺生、偷盜、邪淫、妄語綺語、飲酒の五戒の罪過を責めつける件りに^{注⑫}ヒントを得て構想化されたものらしい。五色の鬼(玉)と五戒との対応関係が一致し、しかも、「大原問答」のこの場が、問題の「九品の浄土」へと直結していることを考えあわせると、ここに趣向どりがあつて、構想成つたことは明らかであろう。このように、「一心五戒魂」は、粉本「鳥羽恋塚物語」のみならず、更に遡って、その粉本の拠つた「大原問答」からも想を得て、劇構造の大枠が固められていることが注目される。

扱、「大原問答」は、以上の如く、その改題改作本である「念仏往生記」のみならず、一方で、「鳥羽恋塚物語」、同上改変本、「一心五戒魂」と続く系譜にも、少なからぬ影響を与えている。これら諸作では、内容上の関連は明白であり、同一作品群として次第に展開され書き綴られてきたことになる。しかし、そのことが、これら諸作が同一作者によって創始され改変をみてきたことを直ちに意味するかどうかは、やはり、慎重な考証を必要とするであろう。

従来、正本が確認されない「大原問答」を除いて、「鳥羽恋塚物語」「念仏往生記」「一心五戒魂」は、概ね近松存疑作とみられてきた。^{注⑬}しかし、作者に近松を擬すのは、いずれも後の改題本、改作本の奥付などに拠るものであり、やはり、存疑の域を出るものではない。

ない。作者、改作者の認定は、これら諸本の書誌面での綿密な検証に加えて、「念仏往生記」の流れでは、その「名所づくし」に若干の補正を施こし襲用された「からあや名所づくし」を有す義太夫正本「文武五人男」との関係、また、「一心五戒魂」の系譜では、この作が、近松死去の翌享保十年六月の竹本座盆興行に、招魂の意をこめて「復鳥羽恋塚」と改題されて再演された背景事情など、考察を加えねばならぬ問題も少なからず残る。今のところ、近松作を積極的に否定すべき資料は見当たらないが、さりとて近松作と確定する決め手も欠く。ともあれ、著作批判に関しては後日を期すこととして、ここでは、前記諸作が同一作品群を形成していることをひとまず確認した上で、もう一度、「九品の浄土」に話題を戻して、小論を締め括ることにする。

五

「九品の浄土」は、最初にも述べたように、「大原問答」「鳥羽恋塚物語」「念仏往生記」と、加賀掾だけでも三作に用いられた。このうち、「大原問答」は所在を聞かぬが、「竹子集」に節事が残ることも、繰り返し述べた通りである。そこで、同集所収の「九品の浄土」と他の二作のそれらとを比較するに、「鳥羽恋塚物語」の場合は、文章節章共に全くといってよい程に同じである。これに対して、「念仏往生記」の場合は、多少の異同を認めざるを得ない。殊に、前者の場合、絵入本は殆ど同じである。八行本では僅かな差異が出るが、しかしそれとても、「大原問答」と「念仏往生記」の差程ではない。つまり、「大原問答」の「九品の浄土」に最も近いのは、「鳥羽恋塚

物語」の、それも絵入本のそれということになる。「鳥羽恋塚物語」再演の折、「大原問答」の節付そのままに語られたのであろう。早大絵入本は、まさにその折の正本であり、八行本は、その後新彫されたものと推定される。そして、「大原問答」を襲用した「鳥羽恋塚物語」の「九品の浄土」と、「念仏往生記」のそれに僅かながら相違がみられる事実は、「鳥羽恋塚物語」の再演時期が、「念仏往生記」初演時（天和三年二月以降）よりも早いことを示している。「鳥羽恋塚物語」再演後、加賀掾の語りに微妙な変化があったのであろう。

このように、「大原問答」と「念仏往生記」の「九品の浄土」では、同じ加賀掾の語り物とはいえ、その節付には若干の差異が認められる。そして、同様のことは、他の節事——「名所」「道行」——についても指摘出来る。とりわけ、「道行」の場合は、夙に藤井乙男氏が指摘された如く、節付のみならず、本文にも、僅かな、しかし場合によっては、重大とも思える違いが存するのである。次に、「近松全集」第一巻解題を引用する。

只道行の発端「あらいたはしや清姫種直兄弟は、都とは西やらん東ともいさ白雲の東西わかぬ旅の空」とあるのが、「竹子集」や「道行揃」では、「あらいたはしや、種直は都とは西やらん東ともいさ白雲の東西わかぬひとり旅」となつて居る。されば初稿の「大原問答」には清姫といふ女性がなかつたのを、再稿の際色どりとして書き添へたのである。尤も此一婦人の有無は大體の構造にさしたる影響を及ぼす程の事はない、只種直の一人旅では石堂丸との類似が甚しく、且一曲中一人も女形のない淋しい舞台となるから、再案にかく改めたものであらう。

藤井氏の道行文違いの指摘は重要なものであった。しかし、「初稿の「大原問答」には清姫といふ女性がなかつた」というのは誤りである。同氏引用の「道行揃」を見るに、確かに本文は、氏の指摘の通りである。しかし、この「道行揃」は絵入本で、「大原問答」の挿絵には、道行く「たねなを」を追うように、後の山藪を行く「ひめ君」「めのと」が描かれている。おそらく、この「ひめ君」は「清姫」に相当するのであろう。したがって、「清姫」は、「再稿の際色どりとして書き添へ」られたものではない。「大原問答」から登場していた。しかし、道行が種直の一人旅か、清姫種直兄弟の二人旅かという違いは、乳母の有無の違いも含めて、その後の劇展開にある程度の影響を与えざるを得ないであらう。二人の兄弟を主人公として形象化されている「念仏往生記」の二段目切や四段目が、「大原問答」と「大體の構造にさしたる」違いがなかつたのかどうか、気になるところである。かりに、「たねなを」を追っていた「ひめ君」や「めのと」が、「道行」の直後にでも追い付き、一緒になればまだしも、もしそうした劇展開でなければ、当然、「大原問答」と「念仏往生記」のその後の劇局面には差異が認められる筈である。そして、まさしく初稿から再案へというそうした書き換えがあったとするならば、例えば四段目などでは、「大原問答」「鳥羽恋塚物語」と石堂丸がかりの趣向が連続して、さすがに繰り返しての頼用を避けての再案ともみられるわけで、前述の「九品の浄土」といい、このあたりの劇展開といい、「念仏往生記」の成立に、「鳥羽恋塚物語」が微妙な影を投げ落していることが注意されるのである。

(注)

- ①『近松全集』底本は京大蔵八行四十八丁本とあるが、四十九丁本の誤り。
- ②「念仏往生記」の成立は、藤井乙男氏が天和頃(『近松全集』第一巻解題)、信多純一氏は、更に絞って、天和三年二月刊「乱曲集」以後、元禄三年八月までの間とされる(古典文庫『古浄瑠璃集』〔加賀掾正本一〕)所収「宇治加賀掾年譜補正」。
- ③横山重、室木弥太郎、阪口弘之共編『古浄瑠璃正本集』第九(角川書店。昭和五十六年二月)に全文翻刻。
- ④「袈裟御前物語」が絵入本「鳥羽恋塚物語」の影響を受けていることは、その挿絵の類似からもいえる。即ち、「袈裟御前物語」挿絵四図(いずれも見開き)のうち、はじめ三図は、「鳥羽恋塚物語」に直接依拠した図柄である。最後の大仏供養の描かれた図のみ異なるが、これに対応すべき「鳥羽恋塚物語」のそれは新刻されたものであり、その初印本には、「袈裟御前物語」とほぼ同様の図柄があったものと推定する。
- ⑤引用本文は、『近松全集』第六巻に拠る。ただし、節章は省略。
- ⑥『国語国文』昭和三十四年六月号所収「出世景清」の成立について「参照」。
- ⑦本書は「公慶上人年譜集會」の抄本(信多純一氏御示教による)。
- ⑧鳥越文蔵、チャールス・ダン氏共編『古浄瑠璃集』(大英博物館本)。(古典文庫)所収。
- ⑨加賀掾正本「大原問答」は、所在不明である。したがって、論述がその内容に及ぶ時は、便宜上、改題本(一部改作力)の「念仏往生記」に拠ることにした。ただし、扱いに問題がある場合は、適宜注記を加えた。

- ⑩因みに、「源氏烏帽子折」は、従来、初演本を「烏帽子折」、その改訂本を「源氏烏帽子折」とみているが、この慶大本「源氏ゑぼしをり」(山城少掾旧蔵本も含めてよい)は前者初演本に属し、通説には問題がある。当初より、両題が行われていたのであろう。
- ⑪「大原問答」のこの局面(蓮生と子との対面場)は、本論中に述べるように、種直に姉清姫も交えた「念仏往生記」と同趣であったかどうか、分明でない。しかし、蓮生の対面が、種直一人、又は姉弟二人のいずれの形をとるにせよ、それが「苺萱」がかりであったことだけは間違いなからう。したがって、「鳥羽恋塚物語」への影響を認めてよいものと確信する。
- ⑫この劇局面も、「念仏往生記」と同じ形で「大原問答」にあったかどうか、確認は出来ない。しかし、この場が比較的短かく、すぐ後に続く「九品の浄土」が同文であることからみて、両作の五段目は同一であったと推定する。
- ⑬例えば、祐田善雄氏は、「念仏往生記」「一心五戒魂」を存疑作(『浄瑠璃史論考』所収「近松年譜」)、森修氏は、「念仏往生記」は近松作とされるものの、「鳥羽恋塚物語」「一心五戒魂」は存疑作とみておられる(『近松門左衛門』所収「近松作品年表」)。
- ⑭「鳥羽恋塚物語」「一心五戒魂」には近松の署名は認められないが、「復鳥羽恋塚」八行本奥書には筑後掾・近松の署名がある。又、「念仏往生記」の加賀掾本には近松在名本は見当たらないが、その加賀掾八行本を襲用し、三段目の「名所づくし」を「洛陽

町づくし」と改めた義太夫正本「大原問答」は、義太夫・近松連名の奥書を有す。なお、諏訪春雄氏「延宝の近松——存疑の世界——」（『文学』昭和五十年六月号）、同「近松青年期の述作」（『学習院大学文学部研究年報』第二十六輯）は、近松署名の有無などを規準に、類同作品間に於るこの種の関係がよく整理されている。

⑮「大原問答」と「念仏往生記」との関係を究める上で、慶大図書館蔵「念仏往生記」（五段。絵入十七・十八行本。「近松門左衛門全集」第二巻に挿絵一部を掲載）は示唆に富む。僅か十一丁半本であるが、版式からみて、次の三部から成り立ち、①→②→③の順で版が新しくなる。

①初丁〜三丁目 柱「大」（二丁目はナシ） 十七行

②四丁目〜六丁目 柱「念」 十八行

③七丁目〜終丁 柱「念」（終丁は不明） 十七行

今、これらを八行本「念仏往生記」と比較してみると、③の本文章節がほぼ完全に一致し（各段冒頭形式句の有無などの小異はある）、②より新しい②は、その八行本本文（③も同じ）を適宜刈り込んだ所謂省略改変本文をもつ。慶大絵入本はこの段階で成ったもので、したがって、周知の八行本より更に一段階後の正本であることが判明する。しかし、最も古い①は、八行本と本文は一致するものの、節章が異なり、信多氏の指摘にもある如く（「宇治加賀掾年譜補正」参照）、柱に「大」とあることからみて、「大原問答」の板木を利用したものかもしれない（ただし、初丁内題は「念仏往生記」とある）。この①丁は、挿絵見開き一図を含む関係で、本文は初段半ば迄（『近松全集』第一巻、

二〇四頁初行「たりける。いかに小次郎」迄）しかないが、この本文が所謂「念仏往生記」と一致すること、更に、「名所」「九品の浄土」が同文であることからみて、「大原問答」と「念仏往生記」は、藤井氏の指摘のように、「大体の構造にききたる」違いはなかったかもしれない。しかし、逆に、第四丁以下（②、③）が、原「大原問答」の板木を利用していないこと（尤も、②部分の改刻前にあった丁——丁付からみて全部で八丁分カ——が、①と②のどちらと同版式であったかが問題であるが、②に「念仏往生記」と同じ「道行」があること、更に、②の板心の形式が①と一致することなどから判断して、①よりも②と同版式であったと推定する）を取り上げるならば、「注⑫」でその理由を述べたような五段目などは除かれるとしても、他は、改変をみたという可能性を完全に否定することは出来ない。とりわけ、「道行」の差異が絡んでくる二段目や四段目は、慎重な検証が必要であろう。

（付記）

本稿を草すにあたっては、室木弥太郎先生より資料の恩借をはじめ格別の御高配を忝うした。図書閲覧でお世話にあずかった雲英末雄、小林元江、柴田光彦氏、及び関係各図書館とあわせ、厚く御礼申し上げる。

なお本稿の骨子は、演劇研究会（昭和五十五年十二月）で発表した。